

2026年度 埼玉医科大学短期大学
看護学科
一般選抜、社会人特別選抜
小論文

問題用紙 2枚

答案用紙 1枚

【1】次の文章は、益田ミリ著『小さいコトが気になります』の中の「お金の確認」という話である。この文章を読んで、後の問いに答えよ。

その場所を通るとき、いつも「あっ」と思う。

「あっ」と思って立ち止まり、「あっ、ちがった」と立ち去るのである。

最寄り駅の通路の床に、丸い銀色のネジのようなものがポツンと埋め込まれている。視力が悪いわたしには、それが百円玉に見えてしょうがない。

そうだった、お金じゃないんだった。ちょっとがっかりする。

そして、そのことを忘れ、返す返す「あっ」と、反応してしまう。

先日、たまたま知り合いと一緒に歩いているときも、うっかり立ち止まってしまった。

「どうかした？」

「あ、いや、百円玉、落ちてるのかと思って、ははは」

正直に言ったところ、こう返された。

「それ、前も間違えてたよ」

はずかしい。

まるで、(A)。

お金を拾う夢をよく見た時期がある。

会社員を辞め、あてもなく上京して間もない頃だった。貯金や退職金もあったし、お金に困っていたわけではなかったのだが、夢の中では、お金が落ちていないかと、人通りのない路地を探して歩いている。

夢の中で見つけるのは五百円と決まっていた。それも10枚、20枚まとまって落ちている。大急ぎで拾っているところで目覚めるのだが、しばらくは、てのひらに五百円玉のひんやりした感覚が残っているくらいリアルな夢だった。

夢といえば、ちょっと夢っぽいできごとがあった。夜の駐輪場での一幕である。

駐輪場は有料だった。料金を支払うために精算機に向かったところ、わたしのすぐ前をひとりの若い女性が歩いていた。

夜だし、周囲は薄暗い。

彼女の足元の半歩先に、銀色の丸いものがふたつ落ちていることに気づいた。

ネジではなかった。百円玉と、五十円玉が一枚ずつ落ちていた。

彼女がちらりとわたしを振り返った。お金が落ちていることを、背後の人(わたし)が知っているのかどうかを、気配というか、空気というか、そういうもので感じ取ろうとしたのだと思う。

わたしがお金の存在に気づいている、ということを、彼女は「感じ取った」。で、どうしたかという、彼女は(B)。

一連の流れが可笑しくなり、自転車に乗って帰る夜道、声を出して笑ったのだった。

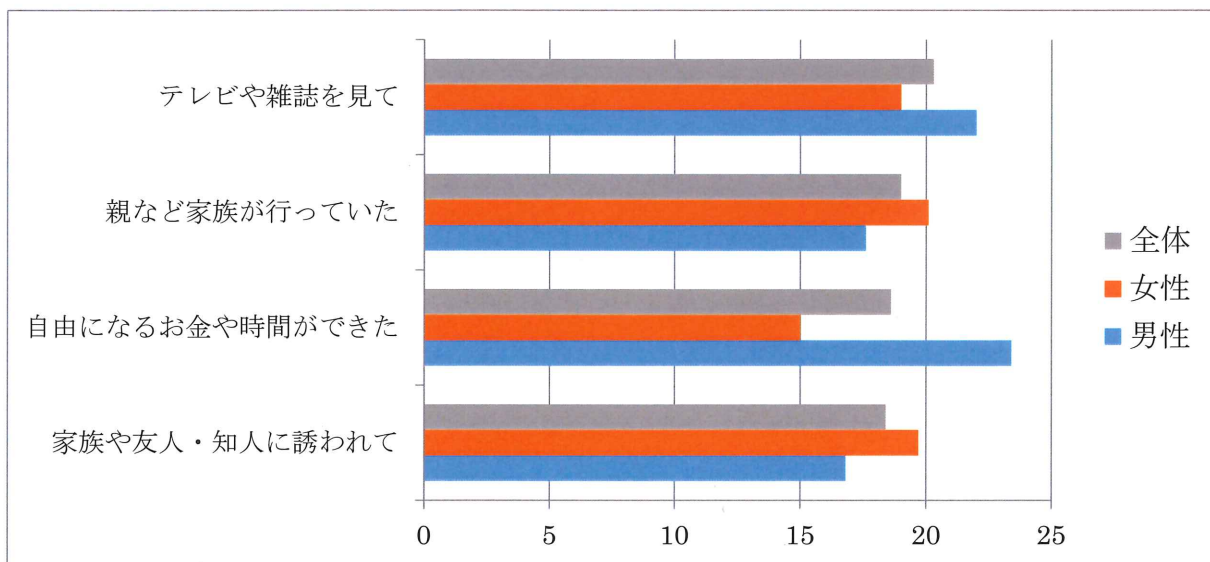
(益田 ミリ 著 『小さいコトが気になります』株式会社筑摩書房より一部改変)

問1 空欄Aに入ると思われる「はずかしい」内容を、「まるで、」に続くように、40字以内で答えよ。

問2 空欄Bに入る内容を、下線部「一連の流れが可笑しくなり、自転車に乗って帰る夜道、声を出して笑ったのだった。」から想像して、「一連の流れ」を100字以内で述べよ。

【2】 一般社団法人「日本ホビー協会」が刊行した『ホビー白書』（2019 年版）によると、「ホビー（趣味）を始めたきっかけ」と「1ヶ月当たりのホビー支出額」は、次のとおりである。この図表1・2を見て、アンケートからわかることと、その結果に対するあなたの考察（分析）を300字以内で述べよ。

図表1 ホビーを始めたきっかけ（複数回答、上位4項目、単位は%）



図表2 1ヶ月当たりのホビー支出額（単位は%）

	(全体)	(女性)	(男性)
授業料・テキスト代	19.8	25.4	14.0
道具・材料費	80.2	74.6	86.0

